萩原朔太郎全集

第一巻

原

萩原朔太郎全集

第一卷

筑摩書房

萩原朔太郎全集　第一卷
昭和五十年五月二十五日初版發行

著　者　萩原朔太郎
發行者　井上達三
發行所　筑摩書房
東京都千代田區神田小川町二―八
電話(二九一)七六五一(代表)
振替口座　東京六―四一二三
本文整版印刷＝株式會社精興社
寫眞製版印刷＝株式會社東京美術印刷社
製本＝牧製本印刷株式會社

(分類) 73501(製品) 73501 (出版社) 4604

凡例

一、本全集は、萩原朔太郎の既發表、未發表を問わず、詩・短歌・俳句・アフォリズム・詩論・文明論・書評・序跋・書簡・各種ノート等にわたって、全業績を收録することを目途とした。

一、本卷（第一卷）は、『月に吠える』『青猫』『蝶を夢む』の三詩集を收めた。

一、本卷詩篇・序跋は、前記三詩集と同じ順序で排列した。ただし『月に吠える』再版の著者序文なども加えた。また『月に吠える』と『青猫』の挿畫は、初版では區々に挿入されているが、本卷では各詩集ごとに一括した。

一、詩集本文は、それぞれの初版を底本としたが、正字正假名遣に統一した。

次のような場合、訂正した。

1　明らかな誤字・誤植

2　假名遣の誤り・俗字

ただし、著者以外の筆者による序跋文中の假名遣で、「用ひる」についてはそのままとした。

3　踊り字（々、ゝ、〳〵）

次のような場合、原文のままとした。

1　著者獨得の用字・用語

例　家根、魔醉、嬲（なぶ）めかしく、いつさいに、とうえんに、しんめんたる、等

2　音象的表現

例　そうそう、はうはう、ぼうぼう、さわさわ、そわそわ、ふわふわ、等

3　著者の造語とみられる語彙

例　兇逞、胎出、愛溺、疑案、爆入、等

4　送り假名の送り過ぎ、送り足りないもの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

例　厭やらしい、之れ、殆んど、輝やく、鋭どい、必しも、等

5　外來語表記

例　ふほふく、ふおうく、ふほく、らうまちす、らうまちずむ、等

6　慣用表記

例　べにひめぢ、さんしようを、等

7　假名書きされた字音假名遣のうち「さざんか」「もうせんごけ」はそのままとした。また「ずいぶん（隨分）」「るい（類）」は、當時の用法「ずゐぶん」「るゐ」に統一した。

一、行あき、句讀點は初版を尊重しつつも、雜誌・新聞初出形、後版等を參考に決定した。

一、初版との異同に關しては卷末校異參照。

一、詩篇本文の下部に雜誌・新聞等に發表された初出形を收め、その雜誌・新聞の名稱、號數・發行年月を附記した。

ただし『蝶を夢む』中の『月に吠える』と『靑猫』より轉載された作品については、これらの詩集形を初出として扱った。

一、詩篇初出形は、俗字・假名遣の誤用・送り假名の過不足・誤字・誤植・變體假名等を含めて、嚴密に原形通りに轉載した。

一、初出形が詩篇本文と異なる次のような場合は、當該文字の横に「・」を附して讀者の注意を喚起した。

1　俗字・當て字等

例　纖毛、秘密、墓塲、憂欝、旅舘、畵、日雇人（ひやうとり）、等

ただし例記したルビ附きの場合はルビ「や」と漢字「雇」が本文と異ることを示す。

2　假名遣の誤り

例　ふるえ、ふるゑ、ゐやう、あほげば、はぢめた、おとめ、ちいさな、等

3　誤字

例　詩扁、堀る、魚臘、合唄、血瞥、腦ましい、等

4　誤植

例　いです、くにやぐにや、ここにおいて、奴らた、ゐるのてす、等

ただし初出形中の「●」は原文に著者自身の附したものである。

一、脱字は當該箇所に〔　〕で補った。

例　しだ〔い〕に、うづ〔く〕まる、やさ〔し〕い、等

一、本文に該當の字句がなく、かつ初出が誤っている場合は、その字句に「・」を附し、さらに〔　〕で正した。

例　つみる〔つるみ〕、死臘〔屍蠟〕、等

一、各詩篇のもとになつた草稿は「草稿詩篇」として活字化した。

一、詩篇の校訂、及び後版諸本との校合を「校異」に於て明記した。

一、三詩集と、初出形及び草稿詩篇については、卷末に「解題」を附した。

目次

月に吠える

序（北原白秋）……五
序……一〇
詩集例言……一五

竹とその哀傷

地面の底の病氣の顔……一八
草の莖……一九
竹……二〇
竹……二一
すえたる菊……二三
龜……二四
笛……二五
冬……二六
天上縊死……二七
卵……二七

雲雀料理

感傷の手……三一
山居……三二
苗……三三
殺人事件……三三
盆景……三四
雲雀料理……三五
掌上の種……三六
天景……三七
焦心……三七

悲しい月夜

かなしい遠景……四〇
悲しい月夜……四一
死……四二
危険な散歩……四三
酒精中毒者の死……四四
干からびた犯罪……四五
蛙の死……四六

くさつた蛤

内部に居る人が畸形な病人に見える理由……四九
椅子……五〇
春夜……五一
ばくてりやの世界……五二
およぐひと……五四
ありあけ……五五
猫……五六
貝……五六
麥畑の一隅にて……五七
陽春……五八
くさつた蛤……五九
春の實體……六〇
贈物にそへて……六一

さびしい情慾

愛憐……六四
戀を戀する人……六五
五月の貴公子……六六
白い月……六七
肖像……六八
さびしい人格……六九

見知らぬ犬

見しらぬ犬……七四
青樹の梢をあふぎて……七五
蛙よ……七七

山に登る……七八
海水旅館……七九
孤獨……八〇
白い共同椅子……八一
田舎を恐る……八一

長詩二篇

雲雀の巣……八四
笛……九一
跋　健康の都市（室生犀星）……九五
挿畫附言（田中恭吉・恩地孝四郎）……一〇三
故田中恭吉氏の藝術に就いて……一〇八
再版の序……一二五
挿畫附言　第二版附記（恩地孝四郎）……一二九

挿畫（田中恭吉・恩地孝四郎）

田中恭吉遺作十一種
1 畫稿より　口繪
2 空にさくエーテルの花　中扉
3 冬の夕
4 畫稿より　I
5 畫稿より　II
6 畫稿より　III
7 こもるみのむし（假りに題して）
8 懈怠
9 死人とあとにのこれるもの
10 悔恨
11 夜の花　包紙として
恩地孝四郎版畫三種及圖一種
1 抒情（よろこびあふれ）
2 抒情（よろこびすみ）
3 抒情（ひとりすめば）
4 われひらく　表紙に用ゐて

再版　抒情（願求）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

青猫

序……一三三
凡例……一三七

幻の寢臺

薄暮の部屋……一三〇
寢臺を求む……一三三
沖を眺望する……一三五
强い腕に抱かる……一三六
群集の中を求めて歩く……一三八
その手は菓子である……一四〇
青猫……一四三
月夜……一四四
春の感情……一四五
野原に寢る……一四六
蠅の唱歌……一四七
恐ろしく憂鬱なる……一四九

憂鬱なる櫻

憂鬱なる花見……一五五
夢にみる空家の庭の祕密……一五七
黑い風琴……一五九
憂鬱の川邊……一六一
佛の見たる幻想の世界……一六三
鷄……一六四

さびしい青猫

みじめな街燈……一六九
恐ろしい山……一七〇

題のない歌……一七一
艶めかしい墓場……一七二
くづれる肉體……一七三
鴉毛の婦人……一七四
綠色の笛……一七五
寄生蟹のうた……一七六
かなしい囚人……一七八
猫柳……一七九
憂鬱な風景……一八〇
野鼠……一八一
五月の死びと……一八二
輪廻と轉生……一八三
さびしい來歴……一八四

閑雅な食慾

怠惰の暦……一八八
閑雅な食慾……一八九
馬車の中で……一九〇
青空……一九一
最も原始的な情緒……一九一
天候と思想……一九二
笛の音のする里へ行かうよ……一九四

意志と無明

蒼ざめた馬……一九七
思想は一つの意匠であるか……一九八
厭やらしい景物……一九九
囀鳥……二〇〇
惡い季節……二〇一
遺傳……二〇三
顔……二〇五
白い牡鷄……二〇六
自然の背後に隱れて居る……二〇七

艶めける靈魂

艶めける靈魂……二一二

花やかなる情緒……二二四
片戀……二二六
夢……二二八
春宵……二三〇
◉◉◉◉◉◉◉◉◉
軍隊……二三四
附錄　自由詩のリズムに就て……二三九

蝶を夢む

詩集の始に……二五九

蝶を夢む（詩集前篇）

蝶を夢む……二六三
腕のある寢臺……二六四
青空に飛び行く……二六六
冬の海の光を感ず……二六七
騷擾……二六八
群集の中を求めて歩く……二六九
内部への月影……二七一
陸橋……二七三
灰色の道……二七三

挿畫

青猫之圖
西洋之圖
古風ナル艦隊
海岸通之圖

その手は菓子である……二七六
その襟足は魚である……二七八
春の芽生……二七九
黒い蝙蝠……二八〇
石竹と青猫……二八一
海鳥……二八三
眺望……二八四
蟾蜍……二八五
家畜……二八六
夢（とらうむ）……二八六
寄生蟹のうた……二八八
野鼠……二八九
閑雅な食慾……二九〇
馬車の中で……二九一
野景……二九二
絶望の逃走……二九三
僕等の親分……二九五
涅槃……二九八
かつて信仰は地上にあつた……三〇〇
商業……三〇二
まづしき展望……三〇四
農夫……三〇五
波止場の烟……三〇六

松葉に光る（詩集後篇）

狼……三一一
松葉に光る……三一二
輝やける手……三一三
酢えたる菊……三一四
悲しい月夜……三一五
かなしい薄暮……三一六
天路巡歴……三一七
龜……三一九
白夜……三二〇
巣……三二一
懺悔……三二二

夜の酒場……三三
月夜……三四
見えない兇賊……三四
有害なる動物……三六
さびしい人格……三六
戀を戀する人……三九
贈物にそへて……三一
遊泳……三一
瞳孔のある海邊……三二
空に光る……三三
緑蔭倶樂部……三四
榛名富士……三五
くさつた蛤……三六

散文詩（四篇）

吠える犬……三四一
柳……三四二
Omegaの瞳……三四三
極光……三四四

草稿詩篇

草稿詩篇凡例……三四六
月に吠える
草の莖……三四七
竹……三四八
竹……三五〇
○……三五二
すえたる菊……三五三
龜……三五三
笛……三五五

冬……三五七
天上縊死……三五八
卵……三六一
苗……三六一
焦心……三六二
かなしい遠景……三六二
危險な散歩……三六三
酒精中毒者の死……三六四
干からびた犯罪……三六五
內部に居る人が畸形な病人に見える理由……三六六
春夜……三六七
ばくてりやの世界……三六八
ありあけ……三六九
猫……三七〇
貝……三七一
麥畑の一隅にて……三七二
くさつた蛤……三七三
春の實體……三七四
贈物にそへて……三七五
愛憐……三七六
戀を戀する人……三七七
五月の貴公子……三七八
白い月……三七九
肖像……三八〇
見知らぬ犬……三八二
青樹の梢をあふぎて……三八三
蛙よ……三八六
山に登る……三八七
海水旅館……三八九
白い共同椅子……三九〇
田舍を恐る……三九一
雲雀の巢……三九五
笛……三九六

青猫

その手は菓子である……四〇二
月夜……四〇四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com